

主の言葉の真実

シリーズ～預言者の声～

2022/4/24

これまでのおさらい

- 出エジプト～士師時代
 - 最初の預言者モーセ
 - 最後の士師でもあった預言者サムエル
- 統一王朝時代
 - サウル・ダビデ・ソロモン
 - 隆盛を極めたソロモンだったが、晩年異教の神々を持ち込み主の怒りを買う
- 分裂王朝時代
 - 北イスラエル王国最初の王ヤロブアムが王国の北端と南端に「金の子牛像」を造る

南北朝の王たち

北イスラエル王国			南ユダ王国		
ヤロブアム	22年	悪王	レハブアム	17年	悪王
ナダブ	2年	悪王	アビヤム	3年	悪王
バシャ△	24年	悪王	アサ	41年	善王
エラ	2年	悪王			
ジムリ△	7日	悪王			
オムリ△	12年	悪王			
アハブ	38年	極悪	ヨシャファト	25年	善王

△は謀反により王になった人

北イスラエル王国の墮落

- 「ヤロブアムの罪」

- 「彼は主の目に悪とされることを行って、ヤロブアムの道を歩み、イスラエルに罪を犯させたヤロブアムの罪を繰り返した。」列王記上15:34

- 極悪王アハブ

- 「オムリの子アハブは彼以前のだれよりも主の目に悪とされることを行った。彼はネバトの子ヤロブアムの罪を繰り返すだけでは満足せず、シドン人の王エトバルの娘イゼベルを妻に迎え、進んでバルに仕え、これにひれ伏した。サマリアにさえバルの神殿を建て、その中にバルの祭壇を築いた。」16:30-32

列王記上17章1～4、7～8

ギレアドの住民である、ティシュベ人エリヤはアハブに言った。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。わたしが告げるまで、数年の間、露も降りず、雨も降らないであろう。

主の言葉がエリヤに臨んだ。「ここを去り、東に向かい、ヨルダンの東にあるケリトの川のほとりに身を隠せ。その川の水を飲むがよい。わたしは鳥に命じて、そこであなたを養わせる。」…

また主の言葉がエリヤに臨んだ。「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」

エリヤの出現

- 「ギレアドの住民であるティシュベ人エリヤ」
 - 「エリヤ」は“主こそ神である”の意
 - ティシュベはヨルダン川東岸の小さな町
- 突然の雨が降らない宣言
 - 「わたしが告げるまで、数年の間、露も降りず、雨も降らないであろう。」とアハブ王に伝える
 - もちろんこれまでの北イスラエル王国の**主なる神に対する背信の警告**として
- エリヤの養い
 - 南ユダ王国に近いケリトの川で鳥に養われる
 - 異邦人の地シドンのやもめの家で養われる

イスラエルとユダの王国

B.C. 925

Copyright by C. S. HAMM

0 5 10 20 30 40 マイル

0 10 20 30 40 50 60 km

流れる川 首都

よって流れる川 エジプトおよびシリアの攻撃

シドン

ダン

大海

サマリア

アハブとイゼベルとの結婚に伴いもたらされたフェニキヤの祭儀は、イスラエルに暴動を引き起し、ついにオムリの全家が一掃されるに至った。

要塞首都サマリヤは、

B.C. 870

って建て

ベテル

北イスラエル王国

ティッシュベ

ケリトの川

南ユダ王国

エルサレム

エジプトのパロ・シシャクは分裂した王国を急襲し、B.C. 925頃エルサレムを略奪した。

アラムはイスラエルにほとんど絶えどんだ。アハブの戦いで死ぬヤ人は彼に抑

国の記念石柱は、モアブ王メサがイスラエルに勝利を収め、アブ人の独立を回復したことを伝えている。



列王記上17章10～24

彼は立ってサレプタに行った。町の入り口まで来ると、一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤはやもめに声をかけ、「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください」と言った。彼女が取りに行こうとすると、エリヤは声をかけ、「パンも一切れ、手に持って来てください」と言った。彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。」

エリヤは言った。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。主が地の面に雨を降らせる日まで／壺の粉は尽きることなく／瓶の油はなくなる。」やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。こうして彼女もエリヤも、彼女の家のも、幾日も食べ物に事欠かなかった。主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくなかなかった。

その後、この家の女主人である彼女の息子が病気に罹った。病状は非常に重く、ついに息を引き取った。彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはわたしにどんなにかかわりがあるのでしょうか。あなたはわたしに罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」エリヤは、「あなたの息子をよこしなさい」と言って、彼女のふところから息子を受け取り、自分のいる階上の部屋に抱いて行って寝台に寝かせた。彼は主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか。」

彼は子供の上に三度身を重ねてから、また主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命を元に返してください。」主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子供は生き返った。エリヤは、その子を連れて家の階上の部屋から降りて来て、母親に渡し、「見なさい。あなたの息子は生きている」と言った。女はエリヤに言った。「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です。」

やもめの家での養い

- 最後の小麦粉を食べて、息子と二人死を待つばかりであったやもめ
 - この地域でも雨が降らなかったのか？あるいは彼女自身の貧しさの故か？
- やもめに酷なことを要求するエリヤ
 - まずエリヤのためにパン菓子を作り持ってこい。そうすれば「壺の粉は尽きることなく／瓶の油はなくなる。」と主は言われる
- そのとおり実行したやもめ
 - 突然現れた見ず知らずの外国人の要求に、彼女はなぜ従ったのだろうか？
 - 主の言葉通りになった

一人息子の死

- 突然亡くなった一人息子
 - せっかく生き延びたのに…
- エリヤを責めるやもめ
 - 「あなたはわたしに罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」
 - このやもめは息子の死の原因を自分の罪ではないかと考えている
 - 主の言葉に従って、却ってひどい目にあった
- エリヤの心中は？
 - どうして主はこのようなことをなさるのだろうか？

エリヤの祈り

- やもめの息子の遺体を預かる
 - 「エリヤは、「あなたの息子をよこしなさい」と言っ
て、彼女のふところから息子を受け取り…」
 - 彼女は息子の遺体を胸に抱き悲嘆に哭いている
- 主に祈るエリヤ
 - 「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せ
ているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息
子の命をお取りになるのですか。」
- 息子の上に三度身を重ね、祈り続けるエリヤ
 - 彼は**子供の上に三度身を重ねて**から、また主に
向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命
を元に返してください。」

エリヤの祈り

- やもめの息子の遺体を預かる
 - 「エリヤは、「あなたの息子をよこしなさい」と言っ
て、彼女のふところから息子を受け取り…」
 - 彼女は息子の遺体を胸に抱き悲嘆に哭いている
- 主に祈るエリヤ
 - 「主よ、わが神よ、あなたは
ているこのやもめにさえ災い
子の命をお取りになるのです」
- 息子の上に三度身を重ね、祈り続けるエリヤ
 - 彼は**子供の上に三度身を重ねて**から、また主に
向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命
を元に返してください。」

自分の命を与
えようとしたの
だろうか？

せ息

やもめの信仰告白

- よみがえった息子
 - 「主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。」
- 息子を再び手にしたやもめの言葉
 - 「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です。」
- 彼女はエリヤが「神の人」であり、その神である主は本物の神であることを知った

主がエリヤに教えられたこと

- 北イスラエル王国の背信に対する警告として起こった干ばつ
 - 王と民を相手に始まったエリヤの働き
- 異邦人の地に遣わされて
 - 死を待つばかりであったやもめ
 - 起こった奇跡：亡くならない食料・よみがえり
- 彼女が主（の言葉）を信じた
 - これだけことが起こって回心したのは一人の異邦人女性だけ！

五羽の雀がニアサリオンで売られているではないか。
だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない。

ルカ12:6